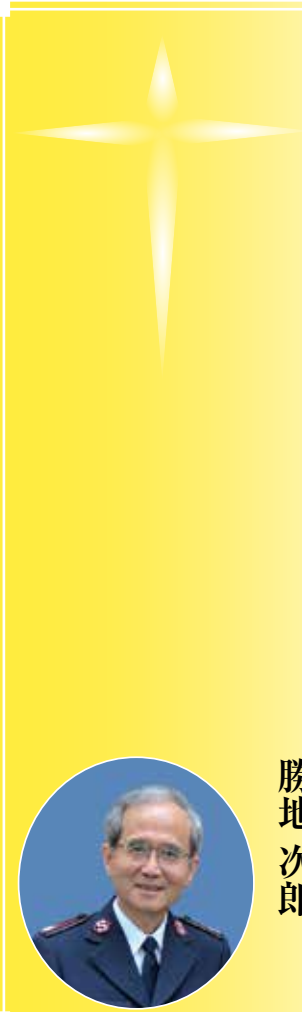


〔クリスマス・メッセージ〕

# 輝き続ける

## 希望の光



勝地 次郎



表現されています。

**人**生は出会いの繰り返しであり、どのような出会いを経験するかに、人の幸福はかかっています。

イエス様に出会い、その人生が大きく変えられた人の中に、ザアカイがいました。彼は、交通の要所として栄えていたエリコの町の徴税人の頭で、金持ちでした。当時、ユダヤの国はローマ帝国の支配下にあり、その権威の下で働く徴税人は、祖国を裏切る罪人として、扱われていました。更に、彼は不正な取立てまでしていたので、多くの人々から嫌われ、豊かでありながら、虚しい生活を送っていました。しかし、イエス様は、愛のまなざしをもって、ザアカイを見つめられました。そして、ザアカイの名前を呼んで、ご自身が彼と共に生きる救い主であることを明らかにされたのです。

れたものを捜して救うために来たのである。」（ルカによる福音書19章9、10節）  
ザアカイは、まさに、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」（マタイによる福音書11章28節）と人々を招かれたイエス様の優しさに触れ、人生の旅を新たな思いで歩み出すことができたのです。

**ク**リスマス―それは、愛なるイエス・キリストと出会い、新しい命を得る日です。イエス様と出会った占星術の学者たちは、来た道ではなく、別の道を通って自分たちの国に帰って行くと伝えられています。その道には、彼らを導いた明るい星は、もはや輝いてはいなくなつたでしょう。しかし、彼らの心には、いかなる星にも勝る希望の星であるイエス・キリストが輝いていたに違いないのです。

られました。その後、イエス様の弟子たちの伝道によって、多くの人々がイエス様を救い主と信じました。彼らを励ました言葉が、聖書に記されています。  
「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。」（ペトロの手紙一1章8、9節）  
あなたにとって、今年のクリスマスが「言葉では言い尽くせないすばらしい喜び」の日となるよう、心から祈ります。  
（救世軍士官〔伝道者〕司令官

### 夜

空に輝く星々。それは、なんと心ときめく美しさでしょう。北海道に浦幌町という町があります。酪農が営まれる自然豊かな町です。かつて、釧路市に在任していたある時、夜半に車で浦幌町郊外を通りかかりました。「あつ、星がきれい！」そう言う同乗者の声が耳に入り、車を止め、空を眺めました。本当に美しい夜空でした。頭上には、あたかも星が降るような、と形容しても過言でない情景が広がっていました。星は私たちの心を高く引き上げる不思議な存在です。

### 今

から約二千年前、イエス・キリストがユダヤの国にお生まれになった時にも不思議に輝く星が現れた、と聖書は記しています。一説では、木星と土星が接近して強烈な光を放つたためであると言われています。この不思議に輝く星に導かれて旅を始めた人たちがいました。ユダヤの国の東方に位置する国からやってきた占星術の学者たちです。彼らは、天文学に通じ、その輝く星にユダヤ人の新しい王の誕生のしるしを見、はるばると旅をしてきたのです。

もし、その旅の途上で、まことに依り頼むべき方に出会うことができれば、その荷は軽くなり、人生の旅を、新たな思いをもち、健やかな足取りで歩くことができるでしょう。  
占星術の学者たちも、旅路の果てに、人生の希望の星であるイエス・キリストを発見したのでした。  
「……東方で見た星が先立つて進み、ついに幼子のいる場所の上にと止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。」（マタイによる福音書2章9、10節）  
「ついに……」という言葉に、長い旅路を経て、ユダヤの王、救い主なるイエス様のもとに導かれた喜びが

「今日、救いがこの家を訪れた。……人の子（イエス・キリスト）は、失われ

### イ



イエス様は、十字架の死より復活し、天に帰

【インタビュー】

# 良い師、良い友、 良い書物に出会って ～神によって備えられた道～



樋野 興夫さん

「がん哲学外来」を提唱し、全国各地で講演に飛び回っておられる、順天堂大学病理・腫瘍学教授 樋野興夫さんにお話を伺いました。

―樋野先生のご出身はどこですか。

樋野 島根県の出雲大社町の鶴峠という小さな浜辺の村です。現・出雲市。島根半島の西端にあり、キリスト教のキの字も入って来ないような所。現在は住民が五十人だそうですが、私がいた頃は百人以上いました。家族は両親と姉二人と私、それに祖父（母の父）と母の兄弟の子ども二人（私のいとこにあたる）の八人でした。父は船乗りで、外国船などの機関長をしていましたから、ほとんど家におらず、家のこと、子どものことは母が一手に引き受けていました。

―先生はどのようなお子さんでしたか。

樋野 言うことを聞かない子でした。しょっちゅう母が学校から呼び出されていました。でも、近所のおばあさんが、いつも

「だいたいようぶ。この子は将来、偉い人物になるから」と母を慰めてくれていました。

そんな私でしたが、ものごころがつかつかない三歳の時から、医者になろうと思っていました。

―三歳の時から!?

樋野 はい。鶴峠が無医村だったからです。病気になるのと、診療所のある隣村まで行かなければなりません。私は小さい頃体が弱かったので、母はよく私を背負って診療所に駆け込んでいました。トンネルを抜けて隣村まで急ぐ、その母の背中との感触を、今でも覚えていました。その時、「大きくなったら医者になる!」と決心したのです。

―先生がキリスト教に出会われたのは、いつですか。

樋野 高校を卒業し、医学部受験のため京都にいた時です。第一志望校の受験に失敗し、予備校に通いました。その予備校の先生が、

東大法学部を卒業して牧師をしている方で、南原繁（政治学者、元東大総長）の教え子でした。その影響で、南原の著書を読み始めました。すると、彼の著書に内村鑑三、新渡戸稲造、矢内原忠雄という名前がたくさん出てくるのです。皆、すばらしいクリスチャンで、良い師弟関係、友情を結んでいました。私は、これら四人の著書を、夜を徹して読みました。

その頃には、キリスト教や聖書についての一般的な知識・理解はありませんでしたが、この四人を通して信仰としてのキリスト教に出会ったのです。

―クリスチャンになられたのは、いつでしょう。

樋野 三十二、三歳の時です。

医者を目指したものの、人と話すのが嫌いだったので、大学では病理学を専攻しました。病理学は、臨床と基礎の橋渡しですから。大学を卒業すると、東京にあるがん研（がん研究会）に勤めました。遺体を解剖し、がん細胞を調べる毎日でした。そして、日曜日は主に内村鑑三の流れの無教会の集まりに出て、聖書の学びをしていました。

二十九歳の時、がん研から遣わされ、ニューヨークのアインシュタイン大学で学ぶ機会を得ました。その間、ニューヨークにあるキリスト教会の礼拝に出席し、日本に帰る時、東京・経堂にあるキリスト教会を紹介されました。その経堂の教会で妻に出会いました。彼女はアメリカから宣教師として来ていたのです。洗礼を受けたのは、その後です。

―素敵な出会いがあった信仰の決断をされたのですね。

樋野 感謝ですね。（笑）結婚式はアメリカで挙げました。その結婚式前夜、忘れられない経験をしました。ベッドに横になつていて、ドアが開いて、白い衣を着た輝く人物が現れました。そしてドアから出て行くようにしたので、ついて行くようにしたら……、目の前には誰もいませんでした。

その時、私は理屈ではなく、実感として「神は存在する」ことを確信したのです。すでに、聖書のこと、信仰のこともわかっているつもりでしたが、この時、神を「実体験」したのです。目で見、手で触れる感覚でした。今でもその時のことをありありと思ひ出します。

それ以来、私はキリスト教徒ではなく、キリスト者――キリストに属する者――である、という思いをもつようになりました。



―お仕事の上での特別な出会いというのはありますか。

樋野 遺伝性がんの発症のメカニズムを解明したクヌドソン博士との出会いです。三十五歳の時、アメリカのフィラデルフィアに留学し、このクヌドソン博士のもとで、研究者としての姿勢や考え方を紙と鉛筆で学問することを学びました。博士は純度の高い専門性を持ち、俯瞰的に物事を見る、森を見て木の皮まで見る、木の皮を見て森を見ろ、ということを教えてくださいました。

―病理学を専門とされる先生から、「がん哲学」がどうして生まれたのでしょうか。

樋野 二〇〇三年のことで、元がん研所長の吉田富三先生誕百年記念シンポジウムの企画・開催に関わることになりました。彼は、世界で初めて内臓がんをラットで作った病理学者です。彼の著書を全部読み、



勉強しました。そして、吉田富三がおこなっていた「がん学」と、尊敬する南原繁の「政治哲学」をドッキングさせました。科学としてのがん学に、哲学的な考えを取り入れる領域があると「がん哲学」を提唱しました。

私は、二十五歳から、遺体の解剖をして臓器を取り、縫い合わせ、がん細胞を調べる毎日を送ってきました。がん細胞を見、触り、診断する——形態学ですね。臨床医のように、患者さんの病気が治る、良くなるという現象には一切接しない生活。人生、空しさからの出発でした。その中で、死すとも生きる、とはどういうことか、を考えさせられましたね。忙しくなかったの、このことをじっくり考えました。大切なことは多くありませんから。

—「がん哲学」をひとりで言うとは……。

**樋野** 生きることの根源的な意味を考え、がんの発生と成長に哲学的な意味を見いだすこと、です。がん細胞で起こることは人間にも起こる、ということですね。私はがんの風貌を見、診断するということをしてきましたから、人間の風貌を見

て、心を読むということは同じだと思いました。

そして、がん患者さんやそのご家族のために、「がん哲学外来」を設ける必要性を覚えました。今、病院の医師の多くは、患者さんの顔を見ず、カルテやパソコンを見て診察します。患者さんの質問に丁寧に答えている時間ありません。そのような医療現場と患者さんの間を埋めるものが、「がん哲学外来」です。場所は病院に限らず、集まりやすい所で、他の患者さんとも交流できる場となることを目指しました。

—具体的に、「がん哲学外来」はどのような来ですか。

**樋野** 暇そうな顔をして、患者さんと対話をします。医者としてではなく、専門知識をもった一人の人間として患者さんと対等な立場になります。お茶を飲みながらのリラックスした雰囲気、三十分〜一時間くらいかけます。

最初の十五分くらいは患者さんに話していただいて、後半は私がおつばら話します。この中で、内村鑑三や新渡戸稲造、南原繁など尊敬する人物の言葉をよく話しています。彼らの著書は

暗記するくらい読んでいますので、患者さんの状態に合わせて、私が慰められた言葉、励まされた言葉などを頭の引き出しから出して語るのです。その他、矢内原忠雄、吉田富三も私の背後にいますので、いわば六人のチーム医療ですね。言葉の処方箋ですから、ただで、しかも副作用なし！（笑）皆さん、入って来た時は打って変わって、明るい表情になって帰って行かれますね。約半分の方がリピーターになられます。

—現在、日本各地で「がん哲学外来カフェ」「がん哲学メデイカルカフェ」などがおこなわれているようですが。

**樋野** 八十個所以上あるようです。私が行く所もあれば、他の医師の方が外来を担当してくださる所、カフェだけの所もあります。がん患者やご家族、またこの活動に関心をもつ人たちが集まって、良い交流の時をもっています。

日本には七千くらいのキリスト教会がありますが、クリスチャンこそ、もつとこの活動を積極的に起こさってくださるといいな、と思っています。カフェに来ることによって、がん患者

さんが、病気であっても病人ではないことを知り、自分のやるべきこと（＝使命）を見いだせるようになる、と思っているからです。旧約聖書に、

「あなたはどこにいるのか」（創世記3章9節）

と、神が最初の人間にかけられた言葉がありますが、これは根源的な問いかけだと思います。それに対して

「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」（イザヤ書6章8節）

と、患者さんが応答できるようになることを願っています。

—病気であっても病人ではない、ですか。意味深い言葉ですね。最後に、先生のこれからの抱負をお聞かせください。

**樋野** メデイカルビレッジをつくることですね。田舎の廃校や空き家を利用して、がん患者さんがゆつたりと過ごすことができる場所づくりです。がんで手術をし

ても、今はすぐに退院です。退院後、様々な不安や痛みを抱えての生活は、家族との人間関係も難しくなりがちです。そのような人たちが、三〜四カ月、医療関係者から病気や治療についてのアドバイスを気兼ねなく受けたり、同病の人たちと心を開いて交流したりする所——それがメデイカルビレッジです。

既に運営委員会が立ち上がっています。まず、私の郷里で進めようと計画しているホテルを利用するという計画も進行しています。

—このような場所が日本各地にできたらいいですね。

**樋野** はい。「がん哲学カフェ」の普及とともに、この計画を進めることが、私の役割・使命だと思っています。不思議ですね。無医村に生まれ育たなかったら、大医学受験に失敗しなかったら、病理学を専攻しなかったら、妻に出会わなかったら、吉田富三の記念シンポジウムに関わらなかつたら……今の働

きにつながらなかつたでしょう。これら一つひとつが神によって備えられてきたとしか思われません。神の言葉―聖書には、

「夕暮れになっても、光がある」（ゼカリヤ書14章7節）

「患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出す」（ローマ人への手紙5章3、4節）

など、すばらしい言葉がたくさんあります。尊敬する偉人たちの言葉と共に、これらの言葉の処方箋を、一人でも多くの患者さんに出していきたいですね。



**樋野興夫（ひのおきお）さんプロフィール**  
 1954年島根県生まれ。順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授、順天堂大学大学院医学研究科環境と人間専攻分子病理病態学教授、医学博士。癌研病理部、米国アインシュタイン医科大肝臓研究センター、米国フォクスチエースがんセンター、がん研究会・がん研究所実験病理部部長を経て現職。2008年「がん哲学外来」を開設。日本癌学会奨励賞、癌研究会学術賞、高松宮妃癌研究基金学術賞、第一回「新渡戸・南原賞」などを受賞。  
 著書は、『がん哲学』（EDITEX）、『いい覚悟で生きる』（小学館）、『明日この世を去るとしても、今日の花に水をあげなさい』（幻冬舎）、『こころにみことばの処方箋』（いのちのことは社）など多数。

\*文中の引用聖句は口語訳聖書

〔信仰の体験談〕

# 神様に すべてゆだねて

## 「ケ・セラ・セラ」



露のききょう



露のききょう(つゆのききょう)さん  
プロフィール

兵庫県西宮市生まれ。本名は新居由樹。落語家の二代目露の五郎兵衛の長女。双子の妹がいる。1979年に女優デビュー。2001年、父の下に入門し、落語家として活動を始める。

最初、妹が洗礼を受け、露の五郎兵衛夫妻、最後に本人が洗礼を受ける。父や妹がつくったキリスト教にまつわる「福音落語」を受け継ぎ、さらにネタを増やして発展させている。

私が神様と初めて出会ったのは、今から三十年以上も前のことです。けれども、洗礼を受けてクリスチャンとなるまで、それから二十五年の時を待たなければなりませんでした。

### ★信仰をもつまで

私は双子の姉として生まれ、父は露の五郎兵衛という噺家―一般に落語家と言われる職業でした。

父の休みは一定せず、家にはいつもお弟子さんがいて、母もそちらに手をとられるという、普通の家庭とはかなり違う生活でした。私はなぜか他所の家庭とそれほど違うとは思っていませんでしたが、双子の妹は、

この環境を私とはかなり違う思いで捉えていたようです。そのことや、その他いろいろなことがあって、妹の方が私より先に教会に行き、信仰をもちました。

私たち家族は「妹がキリスト教の神様を信じた」ということに、かなり戸惑いました。そして家族を代表し、まず私が妹の行っている教会の様子を見に行きました。その教会に好感をもった私は「お墓や両親のことは長女の私が面倒を見るから、妹には好きにさせてあげたら」と父にとりなしました。結果、父は妹がクリスチャンになることを認めました。けれども、後に「お前だけは裏切らんといてくれ」

と私に言ったことを思うと、胸中はかなり複雑だったようです。

そういう父の思いを知ってか知らずか、妹は折に触れて私を教会に誘ってくれました。両親は、妹には、私を教会に誘うな、と言っていたようですが、不思議と私には、教会に行くことについて何も言いませんでした。

### ★まわり道

神様を信じたものの、妹が信仰をもった時のいきさつから、私は両親に「神様を信じた」ということをどうしても告げることができませんでした。ですから、信仰をもつても、親の手前毎週教会に通うことはせず、今までどおり気が向いた時だけ教会に行く、という生活をしていました。しかし、そんなことで、信仰生活がうまくいくはずはありません。

ちょうどその頃から、私自身、女優として本格的に活動し始めたこともあり、どんどん教会から遠ざかってしまったのです。仕事仲

間と遊び歩くのが楽しく、今振り返ると、「神様は、よく私をお見捨てにならないかったなあ!」と思うぐらい、放蕩娘の日々を送りました。

そういう状態の中で、クリスチャンではない人と結婚。その夫の反対もあり、教会からはさらに遠のいてしまいました。そして、子どもを二人授かり、仕事と家庭・育児のことを、十分とは言えないまでも、いろいろな人に支えていただきながら、何とかこなしていました。

### ★「福音落語」誕生

妹がクリスチャンになることに反対していた両親で

したが、二〇〇三年十月二十六日、二人そろって洗礼を受けたのです! 妹が祈り始めてちょうど二十年目でした。このことについては、本当に数えきれない神様のご計画があつて、まさに驚くばかりの出来事でした。

そして、あちらこちらの教会から、クリスチャンになった証しを話してほしい、とのことお招きを受けるうちに、「福音落語」が誕生しました。最初の福音落語「教会根問」は、父のために妹がつくりました。これは、上方の前座噺の形を踏襲したバカバカしい感じの噺ですが、実は、とてもしつかり福音が語られています。二つ目の福音落語は父がつく



りました。聖書にある「放蕩息子」のたとえ話を江戸時代に置き換え、人情噺風にしました。

父は、この話をもう少し練り上げようと思っていたようでしたし、この他にもライフワークとして福音落語をつくっていきたいと思っていたようでした。が、その志半ばで召天してしまいました。

### ★洗礼を受ける

さて、もともとと丈夫ではなかった私は、結婚して四年経った頃、自己免疫性肝炎になり、家庭と仕事の両立プラス病気との付き合いが始まりました。そんな生活の中、ちよつとした考え方や宗教観の相違、夫と私の親との確執などなど、様々な事が絡まりあつた末、ついに離婚することになりました。

いろいろ大変でしたが、この時は、それからの生活



双子の妹 菅原早樹。伝道賛美家、おしゃべり賛美家として活動している

の不安などよりも「これでやつと教会に行ける！そして洗礼を受けられる！」という思いでいっぱいでした。

どこの教会に行こうかと迷った中で、以前、福音落語で招いていただいたことのある教会に導かれ、洗礼を受けるに至りました。父の召天のすぐ後でした。その後、私の福音落語家としての活動が本格化していききました。

### ★福音落語家として

福音落語―最近は一一般の方々に親しみをもっていただけよう、ゴスペル落語と言ったりしていますが、こ



父と二人

の福音落語の良いところは「笑うと人は誰でも心を開いた状態になり、その開いた心に福音の種まきができる」というところ。その他、年配の方、男性の方にも教会の敷居を低くしまし、また「キリスト教は外国の宗教」と思っている方にも、「聖書はこの国・どんな人にも共通する普遍的なもの」ということがよくわかります。それと同時に、落語を見たことのない人には日本の伝統芸に触れてもらえるという利点もあります。

### ★現在の活動

現在、私は、膠原病の全身性エリテマトーデスと自



開戦100周年記念集会

己免疫性肝炎という難病の他に、橋本病 慢性甲状腺炎に乳癌の治療、脊柱狭窄症も抱え、自分の体調を整えながらの毎日を送っています。

また、女優・落語家として活動する一方で、日本中のあちこちの教会や集会で福音落語をさせていただいたり、「ゴスペル落語会」や賛美とのコラボレーションなどのイベントを企画したりしています。この福音落語を通して、一人でも多くの方に神様の愛を知っていただきたいと願っています。

### ★私の賜物

この現在の私の状況を知る方々が、あまりに能天気な暮らす私を見て「よく平気でいられるね」と言われるのですが、実は、最近、これこそ神様が与えてくださった賜物だ、と気がつきました。

今までは、芝居をしたり

落語をしたりすることが賜物だと思っていたのですが、それだけではなく、何事にもよくよせず物事の良い面をとらえ、何でも明るく前向きに考える性質が賜物だということに気がついたのです。頭で考えて一生懸命努力してそうするのはなく、性質として与えられているのです。それをより確固たるものとしてくれる聖書の言葉が、詩篇二七篇五節です。

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」(新改訳聖書)

何でもかんでも良いことばかりではないけれど、すべてを神様にゆだねたら、結果的にすべて良いように導いてくださる。だから

### 「神様に

すべてゆだねて

ケ・セラ・セラ」

というわけで、私の出陣は「ケ・セラ・セラ」なんです。

私が生まれてからきょうまでのすべてのことが、偶然ではなく、神様のご計画の内にあつたのだというこ

とを確信し、これからも神様にすべてをゆだねて、

「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」

(マルコの福音書16章15節 新改訳聖書)

どの神様のご命令のままに、日本語の通じるころ、どこへでも出かけて行って、福音落語を届けたいと思っています。

(日本アドベント・キリスト教団 忍ヶ丘キリスト教会所属)

\*放蕩息子―新約聖書ルカによる福音書一五章にある話。

ある日、息子が、父親に財産を分けてもらい、家を出た。そして毎日、遊び暮らし、もらった財産を全部使ってしまった。食べるにも困るようになった。息子は、父に謝って使用人にもらおうと、家に向かった。父親は、遠くから息子の姿を見つけると、走り寄って抱きしめ、大喜びで家に連れ帰った。そして大宴会を開いて息子の帰還を祝った。

神は、神に従わず、自分勝手に歩む人々を待っていてくださり、神の元に戻った人を喜んで迎え、ご自分の子どもとしてくださる、ということ。イエスはたとえて話された。(15章11、24節)



24節